

ファッション ショー



水島一輝



時は、イリスとその仲間たちがまだジエンディア大陸を旅していた頃。

ここは、エリアス都市。ジエンディア大陸で最大の都市。大陸では珍しく空港が配備されていて、数多くの人々がエリアス都市を訪れる。そのため都市は、エリアス王宮を中心にタウンポータル、種類豊富なショップ、レストラン、物品保管所、さらにはフリーマーケット、決闘場もしっかり配備され多くの人で賑わっている。至る所で数多くのイベントも行われていて、退屈しない都市である。

夕方。

「着いたー！」

エリアス都市の入り口で両手を空へ仰いで喜んでいるのは、神秘的な力を持つ「デル族」の最後の生き残りと言われているイリス・イヴィエール15歳。

「なに喜んでるんだよ、イリス。ここには何度も来てるだろ。相変わらず、賑やか過ぎるところだな。さっさと情報を集めて、次へ行こうぜ」

そう言ったのは、カズノだった。

「すぐには行けないのよ、カズノ」

「なんでだよ。エリアス都市は広いて言ったって、うちのパーティーが全員で都市に散らばれば、すぐにそれなりの情報は集まるだろ」

「私も王宮に情報があるかどうか、掛け合ってみるよ、イリス」

そこに割って入ったのは、エリアス王室騎士団長レビ・アレンス。

「そうか、お前はここ出身だったな。さすがナイト様だ！」

カズノはレビの肩に手をポンと置くと、レビは苦笑いした。

「……」

イリスは、本当のことが言えないでいる。自分の旅の目的も伝えずに、それでも自分の旅に同行してくれている。それぞれ目的は違えど、仲間が多いほうが良いと言って皆一緒にここまで来た。それなのに……。こんな状況になってしまったことをイリスは悔やんでいる。もっと私に力があれば。

「まったく、イリスもはっきり言ってやればいいのよ。男どもが前の町でクエストの打ち上げだとか言って、酒や料理をどか食いするからクエストの報酬どころか蓄えていた旅費もなくなったんだってね！ 特にカズノとバン。あんたら二人だよ」

黒月姫は、腕組みをしてカズノとバンを睨みつけて言った。

「チッチッチ！ それは違うよ。お姫様だって、一緒にその場にいたじゃないか」

そう言って、近づいてきたのはバンだ。

「私だけじゃない。みんなあの場にいたぞ。普通に夕食をとってただけだ。覚えていないだろうが、貴様はずっと酒に酔ってクエスト武勇伝だとか言ってこっちは聞きたくない話を食事中ずっと聞くハメになったんだ。周りの席にも聞こえていただろうな。さして自慢できほどの内容ではなかったがな」

「でも、俺は楽しかったぞ。やっぱり、バンはすごいんだよ」

ひょこっとバンの隣に笑顔で現れたのは、旅荷物を背負ったムーウェン。巻物の妖精ジョエも、ムーウェンのそばにいる。

「そうだろう！ やっぱムーウェンは俺のことをわかってるね！ いい子だいい子だ！」

お調子者のバンはムーウェンの頭をコレでもかと撫でてやった。ジョエは何もすることはなかったが、バンの態度を見て少し不機嫌な表情を見せた。

「ガキどもが……」

「まあまあ、姫様。二人とも子供ですから。……でも、アンタたち、また調子乗ったら私のゴッドハンドで二度と調子に乗れない身体にしてあげるから気をつけなさいよ」

苛立ち始めた黒月姫をなだめるジョアンは、一方で拳を握りしめてバンとムーウェンに恐怖を感じさせる。二人はジョアンの拳がどれほどのものか知らないはずがない。ゆえに二人は背筋に冷たいものを感じた。

「ふん」

黒月姫と一緒に幼い頃から育ってきたジョアンになだめられた黒月姫は、背を向けた。

「おっかね〜。ムーウェンも気をつけろ、あーいう女たちにはよ。プライドが高かったらありやしねえ。狙うならカティアかシャオにしろよ」

「う、うん。気をつける。ボコボコにされちゃったら、イリスを守れなくなっちゃう」

「ふ、そうだな」

すると、外見は女性と見間違ふほどきれいなサイアムがイリスに近づいて行った。そして、懐から袋のようなものを出した。

「イリス。これを使えばいい。数日の宿代くらいにはなる」

「えっ！ ダメ！ ダメです。これはサイアムのお金です。ちゃんと私が用意します」

「まあ、いいじゃん。ここはサイアムに甘えてさ。あとで返せばいいでしょ。もう陽が暮れるし、歩き疲れたし、お腹減ったし。とりあえず、タウンポータルでサクッと調べて、今日のところは休もうよ！ ね、イリス！」

二胡という楽器を持った才色兼備な女性・シャオがサイアムのお金袋をイリスに握らせた。

「さあ、行くよー！」

シャオは皆に呼びかけて一人歩き出した。

「サイアム、今日のところはこれを使わせてもらうね」

イリスは本当に申し訳ないといった表情を見せた。

「気にするな。困ったときはお互い様だ。何も感じない奴らもいるがな」

サイアムは、クールに言ってカズノとバンをちらっと見て微笑んだ。そして、すぐにシャオのあとを追っていった。

サイアムのお金の入った袋をイリスは、胸の前でギュッとさらに強く握った。

イリス一行は、比較的に関情がまとまっている都市の中心部にあるタウンポータルにやってきた。イリスたちの情報となるものにはなかったが、カズノは壁に貼ってあったポスターに気づいた。そこには、スポットライト浴びて露出度が少し多めの奇抜な衣装を来た若い女性がポーズを決めていた。それは誰もが参加できるファッションショーのコンテスト告知ポスターだった。

カズノは、詳細を見た。

「ふふーん！ お、グランプリ賞金百万エリー！ 準グランプリでも五十万エリー。準々グランプリ、十万エリー。ククク……」

「何を騒いでいるんだ？ 少しは働いたらどうだ……」

先ほど喝を入れてやったのにといいながら、ポスターを見ているカズノに近づいていったジョアン。

「おう、ジョアン。コレに出てみないか」

「ハッ！ 出ない。自分で出たらどうなの？」

「バカを言え。こういう見せ物は女が出たほうが得なんだよ。前回優勝者も女でこれだ。うちの誰が出たって、勝てる。……いや、女三人が出れば、タイトルは総なめできるぞ。よし、ジョアン、四の五の言わず出っ！ グハッ！」

カズノが話を言い終える前に、ジョアンはカズノの腹に拳を打ち込んだ。カズノはその場にうずくまった。

「！ カズノ！ どうしたの？」

うずくまったカズノを見て、イリスが駆け寄ってきた。周囲のメンバーも何事かと思っ、カズノとジョアンの周りに集まって来た。

「カズノ……」

イリスが声をかけると、冷や汗を流してかなり苦しそうな顔を見せた。声が出てないが、大丈夫だという仕草をした。しかし、腹を抑え苦しそうにしていることには変わりがない。

「イリス、私が黙らせただけだ。心配するほどでもない。このバカが私にこのコンテストに出ると言うから、黙らせただけよ」

「コンテスト？」

イリスは、目の前に貼ってあったポスターの内容をくまなく読んだ。読んでいくうちにイリスの目が少しずつ輝きはじめる。

「私、コレに出るわ！ そして、グランプリを取る！ 旅費のために！」

「えっ、無理して出なくてもここなら稼ぎ口はいっぱいあるだろうし。わざわざ人の見せ物にならなくても……」

ジョアンがそう言うと、イリスは首を左右に振った。

「あまりみんなには苦勞かけたくないから、私がちゃんと稼いでいます。少しゆっくりしてて。……でも、私あまりファッションのこと知らないし。このためにお金は使いたくないし……どうしよう。コンテストは明後日なんだよね」

するとイリスは服を下から引っ張られるのを感じて、見るとムーウェンが笑顔で親指を立てて見せた。

「俺にいい考えがあるよ！ お金をかけずにイリスに似合うファッション、優勝間違いなしだよ！」

「ムーウェン、本当？ ありがとう！ そしたら、お願いするわ」

「任しておいてよ、イリス」

二人はしっかり握手を交わした。ジョエも喜んでいるのか、イリスとムーウェンの周囲を飛び回っている。それを見ていたバンが、

「ちょっとちょっとイリス。そんなガキにファッションが分かるわけないだろ。そう言うのは俺でしょう」

と、腕の見せ所と言わんばかりに自分の腕を叩いた。するとムーウェンの顔がムツとなった。

「大丈夫よ、ムーウェンなら素敵なものを仕立て上げてくれるもの！ ね、ムーウェン」

「うん！ もちろんさ！ ベー」

ムーウェンが舌を出すと、ジョエも真似をしてバンに舌を出した。

「ムキー、ガキには任せておけない。こうなったら、カティア。君も僕のコーディネートで出ようぜ」

「え、私がか。まあ、面白そうだからいいが。それで皆の助けになるならいいぞ。……で、そのコーディネートとやらはバンに任せて大丈夫なのか？」

カティアは特に考えることもせず、というよりなんのことだかあまり分かっていなかった。けれど、仲間と一緒にいるならば大丈夫なのだろうと思っていた。

「ふふふ。カティア。僕を誰だと思っているんだい。僕はスターシーカーだよ。作れないものなんてないさ。マシーンだけじゃない、服もお手のものさ。それと君との愛も一緒に作りたい……」

」

「アイ？」

カティアには、意味が通じていないようだ。あまり地上の世界についてのことは知らない。もっぱら恋愛についてもだ。バンが好意を持っていることもわかってはいない。

「それについては、今後ゆっくり二人で考えていければいいなと思っているんだ、僕は」

恥ずかしすぎてバンの声はあまりにも小さかった。それを隣で聞いていたシャオだけが、ふっと笑っていた。

「二人が出るなら、もう一人出るべきだな。全賞金を獲得するためにシャオ、君も出たまえ」

先程まで地面にうずくまっていたカズノが壁に寄りかかったまま腹を抑え、ゆっくり立ち上がった。先程よりは顔色はいいようだ。しかし、一体どれほどのパンチをくらったのだろうか。まだ苦しそうである。

「私はパス！ 誰かの前に立って見せるほどのモノは持ってないもの。コンテスト当日は、客席で楽しみながら見させてもらうから。サイアムは？ 美形だしそのファントムメイジコスチュームも素敵じゃない？ 出てみたら。男性も出場できるみたいだし、きっと私なんかより可能性はあるんじゃない？」

シャオは、冗談めかしてカズノの言葉を受け流した。

「そうだね。もし、私が出るならば、審査員全員に魔法をかけて私を優勝させるようにしてしまうけどね」

サイアムは無表情だった。カズノはシャオとサイアムが完全に出場する気はないと悟った。そして、残るは……。

「レビ。アンタはどうだ？」

「私も不参加でお願いします。王宮に戻って、おそらく出発までは王宮の仕事をしなければいけないと思うので……」

「ああ、エリアス王室の騎士団長だったな。となると……」

カズノは視線をレビからはずし、一度も話題に出てこなかった黒月姫に移した。互いに目が合うと、カズノはため息を吐いた。

「——貴様、私を見てため息をすとはどういうことだ。それは私では不服という意味か？ はっきり言え！」

「いや、姫が断ると思ったんだよ。出てくれるなら、頼もしいよ」

「そうだろ。イリス一行の中の誰がグランプリを取るか勝負だ。カズノ、ここまで言ったのだ。もちろん貴様が私をコーディネートしてくれるのだろ？」

「ひ、姫様！ カズノではなく私が……」

ジョアンがカズノには任せておけないと思って、口をはさむ。が、

「ジョアン、大丈夫だ。俺にも秘策くらいあるさ。女をひときわ輝かせる秘策がな」

「格好つけて言っても、無論、カズノの手を借りずとも私は輝いているがな」

「まったくこの姫はプライドだけは高いんだからよ……」

カズノは、つい小声で言ってしまった。

「なにか言ったか？」

「いや、別に……」

そこにイリスが輪の中心に入った。

「じゃあ、今日はゆっくり休んで明日は情報を集めつつ、コンテストに向けての衣装作りも頑張ろう！」

メンバーは、おーっとイリスの掛け声に呼応した。底抜けに明るくイリスを嫌いには誰もなれなかった。

翌日。

「ちょっと、ムーウェン。一人でどこ行くの？」

都市のはずれを目指して歩いているムーウェンを後ろから追いかけてきたイリス。息を切らししている。

「イリス！ 僕はこれから衣装になりそうなものを探しに野原地帯まで行ってくる。だから、イリスはここでゆっくりしててよ。陽が暮れるまでには戻ってくるから。そしたら、衣装合わせするね」

純真無垢という言葉にふさわしい子供の表情を見せるムーウェン。

「ダメよ。私も行くわ。ムーウェン一人に負担をかけてはいけません」

「負担じゃないよ！ 大丈夫！」

と、ムーウェンは拳を握って親指を立てて見せた。決まってムーウェンが見せる「任せてよ！」のポーズだ。ジョエも一緒になってムーウェンと同じポーズをとってみせた。イリスは困った顔になってしまった。

「……でも、ダメです！ これは私たち一行のためだし、それに今回はムーウェンと私はチームなんだから。一緒に探しに行きましょう」

イリスはそう言うが、イリス一行の中では最年少のムーウェンが心配だった。ファイターとはいえ、まだまだ子供。一緒に旅をしてもらっているイリスは、保護者としての責任もあると感じていたのだ。

「わかった。そうだね！ イリスも一緒に行こう。でも、僕が先頭行くからね！」

そう言って、ムーウェンは歩き出した。イリスは彼の背中を見ながら着いて行く。いつの間に彼の背中こんなに大きく頼もしくなったのだろうか。これまでの旅がそうさせたのだろう。でも、彼の中にある信念がしっかりあったからこそ、ここまで彼自身を成長させたに違いない。イリスはそんなことを思いながら、ムーウェンと野原地帯へと向かった。

宿のロビーは広く椅子やテーブルが置かれ、宿泊客が今日の予定を決めていたり、まったりしていたりする。その中に黒月姫とジョアンもいた。そこに宿の外へ出て行こうとするカズノの姿があった。

「ちょっと、カズノ！」

呼び止めたのは、黒月姫だ。

「ああ、お前らか。ちょっと、お前をさらに輝かせるモノを入手してくるから楽しみに待っているよ」

「なんだ、私は何もしなくてもいいのか」

「ん～、そうだなあ。俺はルーインウォーカーである姫の弓を構えて矢を放つ姿も嫌いじゃないんだが。……おう、そうだ。姫はアオイチの出身だったよな」

カズノは、黒月姫を頭からつま先までゆっくり眺めて言う。

「ああ。黒月城の主だ。それがどうかしたか？」

「ちょっと用意してもらいたいものがあるんだが……」

「なんだ」

カズノは、こそこそと黒月姫の耳元で囁いた。

「なるほど。それはいい案かもしれん。ここではよく目立つだろう。よし、すぐに用意させよう。で、カズノはどうする？」

「俺はこれから決闘場に行ってくる。女を輝かせるモノをもらいにな」

「決闘場にそんなモノがあるのか？」

「まあ、アイテムをかけての決闘を申し込むつもりでいる。デュエリストである俺なりの戦いだ。これは邪魔してくれるなよ、姫様」

「ふん。いっそのこと、貴様の屍を背負ってコンテストに出てみたいわ」

黒月姫は、胸の前で腕を組み笑顔でそう言った。

「その期待には答えられないとは思うがな。ハハハッ！」

カズノは、そう言い残して笑いながら宿を出て行った。黒月姫の表情はいつになく微笑んでいた。

「ジョアン！」

「はい」

少し離れたところから様子を伺っていたジョアンがスッと黒月姫の横に現れた。

「頼みたいことがある」

「ここは……。色々なものがあるな。ここで何をやるんだい？」

広い会場でたくさんの人々がそれぞれ色々なものを並べて販売しているフリーマーケットにバンと一緒にやってきたカティアが訊ねた。既にバンは入り口近くに店構えしている人の前で物色していた。

「なになって、カティアの衣装の材料を探しに来たんだよ。単に布で服を作ってもインパクトはないから、カティアのイメージを形にしたいと思っているんだ」

「私のイメージ？ それはどんなだ？ バンはどんな風に私をとらえるのだ？」

と、カティアはモノを見ているバンの真横に顔を近づけた。

「それはねえー。……わっ！」

バンは振り向くとカティアの顔がぶつかるくらい近くにあって、バツとすぐに飛び退いた。その顔は赤くなっていた。

「どうだ？」

「え、あ、えっと……。天女様……」

「天女……。私は空の者ではないぞ。海の者だ。それで私をイメージしているつもりか？」

カティアの目が細くなると、バンは冷たい視線を感じた。

「いや、う、海の者なんだけど、こう天を舞うようなフワツとしたというか、水の中を穏やかに泳ぐというか光るといふか……」

バンは追い詰められたような状況で説明した。が、

「バンの考えていることはよくわからんな」

と、カティアは首をかしげて先へ一人で進んで行ってしまった。バンは、ガックリと首を落としてどうして俺はあんなことをしてしまったんだと呟いた。

「カティア、待ってくれ！ おっちゃん、この透明チューブいくらだ？」

バンは、グルグルと巻かれたチューブを持ち上げ、その店の所有者に聞いた。さっきのやり取りを見ていたのか、店主はニヤニヤと笑っていた。

「お兄さんも大変だな。そのチューブをなんに使うのか知らねーけど、いいよ、くれてやるよ。頑張っ、自分のモノにせい！ ハハハ……」

店主の笑いは場内に響き渡るほどの大笑いだ。

「ありがとう！ 俺、頑張る！」

バンはそう言いながら、チューブを握りしめて上へ持ち上げた。そして、すぐにカティアの後を追っていく。

「待ってくれよ、カティア。せっかく一緒に買い物できてるのに」

「私はただ珍しいモノを見ているだけだ。買うつもりはない」

「いや、そういうことじゃなくて……。おっ！ これは！」

カティアに置いて行かれまいと、後ろに着いて行きつつも周囲に並べられた数々の品々をキョロキョロと見ていく。

「なにかすごいモノでも見つけたのか？」

またカティアがバンの真隣りに並び、バンが手にした小さな青く四角い頭から金属の足が二本伸びたモノに顔を近づけて眺めた。

「わぁ~~~~！ 近い近い近い近いよ〜！」

瞬時にバンの身体は硬直し、じっくり見られている手のひらは汗ばみ始めた。意識すれば、カティアの息もその手で感じ取れるほどだ。

「いいではないか。じっくりと見させてくれ。これはなんなんだ？」

「はっ、えっ、ほっ！ で、電気を流すと頭が光るんだあ、これ〜。とっても、キレイなんだあ、これ〜。カ、カティア、見るのはもういいかな？」

「ああ」

カティアは、ゆっくりとバンの手から顔を離した。

「はぁ~~~~」

バンは、全身から空気が抜けたようにヘナヘナになってしまった。

「これも衣装に使うのか？」

「えっ、ああ、そうだよ。コイツをいっぱい線でつないでチューブの中に通すんだ」

「それで衣装になるのか？ なんか光って危なくないのか？」

「大丈夫大丈夫！ 安心して！ 俺の腕を信じてよ」

「そうか」

バンは、持っていた物と同じ物がたくさん入っている箱の中に手を突っ込み、握れるだけそれらを握って若めの男店主に聞いた。

「これでいくら？」

「ん？ 500エリーでいいよ」

「500エリーね。安いね！」

バンはそう言って、店主に500エリー払った。

その後も、バンとカティアはフリーマーケット内を歩き、衣装に必要そうなものを見つけて行った。

野原地帯をムーウェンが先を歩き、その後をイリスが着いて行く。野原地帯に入ってからしばらく歩いている二人。

「ムーウェン、まだ奥まで進むの？」

平気で奥へ奥へと進むムーウェンにイリスは訊ねた。

「もう少しだけね。目当てのモンスターを見つけるまではね。……しっ！」

ムーウェンは何かに気づいたみたいで、口の前で人差し指を立てて静かにという仕草を見せた。それを見て、イリスも歩みを止め、二人は木陰にさっと隠れて周囲に注意する。ジョアも両手で口をふさぎ、ムーウェンにぴったりと寄り添った。すると、何かの羽音が聞こえてきた。それは細かく震える羽音ではなく、もう少し大きくゆっくりとしたものだ。ムーウェンは前方をゆっくりと確認し、イリスに向き直る。前方を見るようにと指を差す。イリスはムーウェンにならって、ゆっくりとムーウェンが見た方を眺めると、きれいな蝶蝶の羽を持ったモンスターが一匹飛んでいるのが目に入った。人ほどくらいの大きさに見える。どうやらムーウェンが言う目当てのモンスターはそれらしい。

「イリスはここにいて。僕が倒すから」

ムーウェンは小声でイリスに言うと、剣をサヤから抜いた。

「待ってムーウェン。真正面から行くとかわされちゃうわよ。だから、私がおとりになるよ」

「それは危ないよ、イリス。ダメだよ。ここは僕が一人で行くから」

「大丈夫よ、これでもエレメンタルマスターなんだから。いざって時は、身を守るから大丈夫！ さあ、気づかれないうちにやりましょ」

イリスは、ムーウェンがいつもやるように親指を立てて任せてよポーズを見せた。

「わかった。でも、本当に気をつけてよ！」

「うん。行くわよ！」

イリスはモンスターの位置を確認して、木陰から飛び出てわざと草の葉にぶつかるように、草を踏みつけるように走っていく。すぐにモンスターはイリスに気づき、羽を激しくばたつかせてイリスに向かって飛んでいく。ムーウェンも飛び出るタイミングを見計らっている。モンスターがムーウェンに背中を向けた。

——今だ！

ムーウェンは、剣をしっかりと握りしめ木陰から飛び出た。

「うお——、疾風迅雷！」

モンスターの背後から二連続の斬撃を繰り出したムーウェン。イリスがおとりになってくれたおかげで、モンスターは背後からの攻撃に気づくのが遅れてかわすことができなかった。

「とどめだ！ メテオウェーブ！」

そして、ムーウェンは深く踏み込み前方へ力強く剣を振り下ろした。モンスターはその攻撃が致命傷になり光りの粉をまき散らしながら消滅した。その場に残ったのは、モンスターの蝶の羽だけだった。

「ムーウェン！ 上手くいったね！」

イリスが笑顔で近づいてきた。

「絶対イリスに似合うと思ったんだよ、これ！」

ムーウエンはそう言って、先ほど倒した大きな蝶の羽を抱えて見せた。

「まあ、きれいな羽ね。私は妖精になるのかな？」

「うん！」

ムーウエンは満面の笑みを見せた。

「これで、明日、優勝できるといいね！」

決闘場の観客席に黒月姫は、一人で座っていた。周囲にはあまりお客はいない。注目されている決闘ではないからだろう。すると場内にカズノともう一人、カズノの対戦相手が登場した。

「あの男は確か……」

黒月姫は目を細めてガッチリとした体格の男を見た。

「まさか、君から決闘を申し込まれるとは思わなかったよ。君ほど宝石と無縁な男がなぜだい」
カズノの正面に立つ男の服・帽子・靴にあらゆる宝石がついて輝いている。まぶしいくらいだ

。「今回ばかりは欲しい物があなたの手の中にあるもんだから、仕方ない。とっと始めようぜ、宝石商狙いのジェム・ウェア」

カズノはジェムの目の前まで近づいてきた。

「お互い、弾は一発。十歩で決着。それでいいな？」

「もちろんだ。悪いが今回はお前に当てると宝石たちが汚れるから、当てるつもりはねえ」

カズノがそういうとジェムは笑い出した。

「ハハハッ！ 笑わせるな。それでどうやって勝つつもりだ。弾を当てなければ勝敗はつかねえぜ」

ジェムの口調から余裕が伺える。すると、カズノはジェムに対して背を向け、

「心配するな。十歩、歩いた後を楽しみにしておけ。俺はお前の弾には当たらない。さあ、背を向けろ」

「ふふふ。面白い。カズノ、俺のコレクションは渡さない」

ジェムも決め台詞を吐き、カズノに背を向けた。お互い背を向けた状態になった。すると、決闘場は静寂に包まれた。その静か過ぎる状況に黒月姫も緊張が走る。

「1・2・3・4・5」

と、二人は掛け声と共に一步一步離れていく。

「6・7・8」

数が増えていくごとに、カズノとジェムの距離はどんどん離れていき、それに比例するように緊張感が高まっていく。

「9」

_____。

_____。

_____。

「10」

——ジェムは、素早く腰に下げていた拳銃を抜いて振り返った。

——カズノは、素早く腰に下げていた拳銃を抜いて振り返った。

と、同時にバーンと銃声が鳴り響く。そして、すぐに金属を弾くような音がした。一部の観客が激しく雄叫びを上げた。その声を聞いて黒月姫は我に返った。何が起きたのか分からないでいる。カズノとジェムはお互いに銃を向けあっている——。どちらも倒れない。

黒月姫は、じっくり二人を見た。

「あっ！」

ジェムの手には拳銃が握られていなかった。ジェムの拳銃は、彼から少し離れたところに落ちていた。

「馬鹿な……」

ジェムは、自分の震える手から落ちた拳銃に視線を持っていった。

「言った通りだ、ジェム。お前には弾を当てていない。拳銃に当てただけだ。そして、俺は無傷。勝負は見えているだろう」

決闘場内に歓声があがった。そして、黒月姫もホッとして胸をなでおろした。

バンとカティアはフリーマーケットで品探しを終えた後、エリアス都市を散策していた。バンは少しでもカティアと一緒にいたいという思いもあったが、当のカティアは何の思いはない。バンと一緒にいこうというからただ隣を歩いているだけだった。歩き疲れたバンは、少し休もうと広場へ行こうとカティアを誘った。

するとバイオリンとは違う、しかし弦と弓で音を奏でる柔らかい音が広場に響いていた。

「どこかで聞いたことのある音だな」

カティアが最初にその音に気づいた。

「ん？ 確かに……。いい音楽だね。でも、俺も聞いたことがあるような……」

音のする方へ行くと人だかりが出来ていた。誰かが楽器の演奏でもしているのだろう。二人は人だかりの後方まで来て、演奏する人物をみた。それはシャオだった。簡易式の折りたたみ椅子に座り、左足の太ももの付け根とお腹の間に二胡を置き、優雅に弾いていた。演奏が終わると一斉に拍手がわき起こる。二人も拍手を送った。

シャオの前にひっくり返して置かれた帽子の中に、次々とお金を入れていく人たち。口々に感想を言い合う人たち。それほどまでにシャオの弾く二胡は素晴らしかった。

「よう、シャオ！」

バンが近寄って行って声をかけた。

「あら、バン！ カティア！ お二人仲良くお買い物かしら？」

「ああ。あ、明日の衣装のな……」

カティアの表情は何ともないが、既にバンの顔はタジタジだった。

「シャオ。素敵な音楽だったな。また弾いてはくれないか？」

「いいよ、カティア」

「なんだよ、シャオ！ 昨日、人前には立ちたくないようなことを言っていて二胡の演奏はいいのかよ」

「え、だって、みんなは二胡を聞いているだけで、別に私を見てるわけじゃないでしょ」

「……まあ、そう言われればそうなのかなあ。それにしても、だいぶ繁盛してるみたいだな」

足元にあった帽子の中のお金の量を見てバンは聞いた。

「そう？ 私なりにやってるだけよ。バンとカティアも明日は頑張ってるよ！」

「任せろよ。ムーウェンとカズノなんかには、負けなせ！」

「ふふ、頼もしい！ 二人に一曲プレゼントするよ。聞いて行ってよ！」

そう言ってシャオは、椅子に座りなおし二胡をかまえた。そしてゆっくり弓を弦に当て、弾き始めた。

コンテスト当日。

広場に設けられた特設会場の中は、多くの人達で賑わっている。運良く客席に座れたシャオ、ジョアン、サイアム。レビはイベントの警備で来ることが出来なかった。

「で、イリスたちはいつ頃出てくるんだ？」

出場者リストを持っているシャオにジョアンが聞いた。

「出場者は全部で50。イリスが48番目。姫様が49番。ふふふ、最後の50番がカティアだね」

「なーんだ、最後の最後かぁ。退屈だな……」

突然会場内が暗くなり、騒然となる。音楽が鳴り出し、ステージの端に設けられたブースに司会進行の人が登場していき、会場は盛り上がる。

「何？ 有名な人？」

ジョアンが聞いた。

「さぁ……。私は初めて見たけど……。サイアム、知ってる？」

と、シャオがサイアムを見ると、さぁと両の手のひらを返した。旅をして移動を繰り返している一行にとっては持ち得ない情報だった。それでも、司会進行役に選ばれているだけあって、ファッションショーの進み具合もなかなかで、大人数が出場していながら飽きのこない喋りとステージ演出は観客を楽しませた。なにより出場者の創作ファッションのレベルがシャオたちが思っていたより高かった。

「この人が終われば次はイリスの番だけど、みんな素敵な衣装ばかりね。これは、もしかしたら誰も賞金もらえないかもね」

「それはないわ。絶対姫様なら優勝します！」

シャオがジョアンの顔を見ると、怖いくらいに目に力が入っていた。

「ジョアン。すごい自信ね」

「ええ。昨夜衣装合わせに付き合ったの。そしたらもう、誰もが目を奪われるよ！」

「ほ、本当に……」

「さぁ、イリスの番だ。ムーウエンのセンスもいかがか」

サイアムがステージに注目しながら二人に言うと、二人はステージに視線を移した。ステージの袖から黒い影が出てくる。スポットライトが当たってないので良く見えない。歩き始めると、スポットライトがバンとイリスを照らした。ライトに照らされたイリスを見て、会場内のボルテージがいき以上に上がった。音楽が聞こえないくらいだ。

一番目立っているのが、イリスの背中に生えた蝶の羽だ。そしてピンクや青、緑と淡い色仕立ての妖精風衣装がイリスをとてもキュートに魅せていた。

「あらー、まるで別人ね」

シャオは感心した。

「ムーウエンもなかなかやるな」

サイアムが笑顔で言った。

「次よ。次に姫様。もっと会場がどよめくはずよ」

ジョアンが目から炎が見えるほど、躍起だっているのがわかった。

「アハハハ……」

シャオは笑うしかなかった。イリスがステージ袖に消えて、入れ替わりにすぐ黒月姫が出てきた。シャオとサイアムはすぐに黒月姫だとは思えなかった。絶世の美女を見ているかのように目を奪われた。驚きのあまり、会場は一瞬静寂に包まれ、イリスの時と同じかそれ以上の歓声が沸き上がった。

普段は肩よりも長い髪をすべてまとめ上げ、黒を貴重とした和装着物姿の黒月姫。そして、着物にこれ程にも似つかわしくないカズノが用意した宝石をまとった首飾りや髪飾り、指輪の数々。コレでもかというくらい光を反射させている。

「オラァ——、これが姫の美しさだぁ〜〜〜〜！ 黒月城で実際にお召しになっている姫様の着物だ」

ジョアンは興奮して叫び始めてしまった。

「ちょっと、落ち着いてよジョアン！ なんか、カズノもズレている気もするけど」

「黒月姫だと、あれほどの宝石ですらカバー出来てしまうものなのか。まったく、女とは怖いものだ」

「……サイアム。あんた、意外と冷静ね」

「優勝はもらったぁ〜〜〜〜！」

ジョアンはまた叫んだ。黒月姫が袖にいなくなると、ゆっくり会場内が落ち着いてく。そして、最後の出場者カティアが袖から出てきた。しかし、黒い影のままスポットライトが照らされない。あちこちで、故障か、なんだと声上がる。それでもスポットライトは点く様子はない。

すると、突然ステージ上で青い光りが灯った。スポットライトの光りではない。カティアを包みこむ青い光り。バンがカティアの衣装に仕込んだイルミネーションの光りだった。点灯しているだけでなく、点滅したり、光が流れていく。カティアはまるですっぽりクラゲの中にいるようで幻想的だ。クラゲ装置のような衣装は透明性が高く、カティアの肌がしっかり見える。水着を着させられているみたいだった。天女というイメージにはほど遠い。

会場内は、イリスや黒月姫の時は違って、なにか神秘的なものに見せられてしまっているうっとりした空気に包まれていた。

「あの男はなにか違うと思っていたが、ここまでズレているとは思わなかった。姫様とバンが組まなくて良かった」

「確かにそうね。カティアもこんな衣装とは思ってもいなかったんだろうけど、あの人も変わり者だから平気なんだろうね」

「だろうな」

シャオの見解にサイアムも納得した。

「おめでとうイリス！ ムーウェンもおめでとう！」

シャオとサイアムが表彰式を終えた二人に拍手を送った。

「グランプリを取れずにごめんなさい。準々グランプリでした」

イリスが表彰状を見せた。ムーウェンは嬉しそうに賞金袋をしっかりと握っていた。

「謝る必要なんてないよ。むしろ、表彰台までに食い込んだだけでもすごいよ。他の出場者の衣装も凄かったし」

「おい、カズノ！ なぜ、あんなに会場が盛り上がっていたのに我々はランク外なのだ」

黒月姫がカズノの襟首を掴んだ。

「くっ！ 知らなねーよ」

「あのクラゲに私たちは……」

「姫さんよ。少なからずあのクラゲには勝ってたから、そこまで落ち込む必要はないと思うぜ」

「嘘をつくな。カティアたちは何かもらっていたではないか。あれは何だ！」

「ああ。あれは、ブービー賞だ。チェリー瓶1本。賞としては貰わないほうがいい賞だ」

「そうなのか。なら、いいのだが……」

片隅で落ち込んでいるバンのところに近寄ってきたムーウェン。

「バン。残念だったね。でも、僕はバンの作ったクラゲも好きだからあ！」

「ムーウェン、お前ってやつは……」

と、バンはムーウェンを抱きしめ涙ぐむ。

「私も好きだったぞ。あの衣装。楽しい時間だった。バン」

「……カティア……。ほ、本当に？」

「ああ！」

そう言ってカティアが微笑むと、バンは大人気なく大きな声で鳴き始めた。ムーウェンがバンの頭を撫でてやると、ジョエも一緒になってバンの頭を撫でてやる。

「まったく。ムーウェンになぐさめられてどうするのよ！」

シャオが言うとイリスをはじめ、みんなが笑った。

「はい、イリス」

シャオはイリスに丸々と膨らんだ袋を見せた。

「なに？」

「昨日、広場で二胡を演奏して稼いだの。これも旅の資金にしてよ」

「でも、これは……」

「いいのいいの！」

「イリス、俺からも。昨日、クエストでもらった報酬。一日でこなすものだったから多くはないけど」

サイアムもお金の入った袋を出してきた。イリスは、ためらいながらも袋を受け取った。

「二人とも……ありがとう！」

「もし、イリスの旅に誘われなければ、こんなに楽しい時間は過ごせなかったと思うし。これが

らもがんがん進もう！」

「うん。みんな、ありがとう！」

「よーし、準々グランプリを祝って、打ち上げだぁ！」

と、ついさっきまで泣いていたバンが、拳を天に向けて意気揚々と叫んだ！

「——もう、打ち上げ禁止！」

すかさず、イリスもバンに負けないうらい叫んだ！

どっとイリス一行は笑いに包まれた。

私にはこんなに暖かく一緒に旅をする仲間がいる。無事、旅を終えたとき、またみんなにありがとうを言おう。

こうしてイリス一行はわずかながらの旅費を手に入れ、また旅を続けることができました。

終わり

ファッションショー

<http://p.booklog.jp/book/27433>

著者：水島一輝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mizu-c/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27433>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27433>